

『ジャック・ロンドン 奇想天外傑作選』を読む

辻井 榮 滋

I

ジャック・ロンドン (1876-1916) は、1910年3月末に『赤死病』という恐るべき大疫病の襲来とそれによる人類の滅亡を予言する物語を脱稿し、その後紆余曲折を経て雑誌連載後ようやく本の形になったのはそれから5年後(1915年5月)のことであった。¹⁾ 赤死病が発生し人類のほとんどが滅亡した年を2013年としているから、奇しくも今年がその年ということになる。そして「その時から60年を経た2073年、ごくひと握りの人間だけが生き残り、すっかり原始社会と化したところで、生き残りの1人である老人が孫たちにその経緯を話して聞かせる²⁾」という途轍もない構想のもとに書かれたSF小説であった。……

さて筆者は、2年前にロンドンの多人種ものを扱った短篇選³⁾を共訳で出版したが、そのなかでも「人力車夫塚長と妻君と、2人の息子の話」(1895)、「さよなら、ジャック」(1909)、「支那人」(1909)、「比類なき侵略」(1910)などはとりわけ、今回取りあげる“奇想天外”ものと大なり小なり相通じるところのある作品ではあった。日本・中国・ハワイを中心とする人々にまつわる意外な展開や結末を見せる物語群で、そうした多様な人種⁴⁾をめぐる話を作者は鮮やかに描出してみせたのだった。

何と言っても200篇にも及ぶ短篇を残したロンドンであるから、様々な括り方が可能なのだが、このたび出した『ジャック・ロンドン 奇想天外傑作選』⁴⁾(以下、『奇想天外傑作選』)には、偶然8篇の短篇を取りあわせた。特段の意図はなく、ただ“奇想天外”という表現がうってつけの興味深い作品群であるのは間違いない。

筆者がこの傑作選にタイトルを付す際にすぐに思い浮かんだのは、“奇想天外”であった。念のため『広辞苑』(第6版)にあたると、「普通の人のもつつかない考え」とある。最近の流行語であれば、“想定外”というところだろうか。物語的には、どんでん返しやアッと言わせる結末、いわゆる“面白い”話が結果的に集まったとは言えよう。が同時に、よく読んでみると、安易な文明生活の利便性の上に胡座^{あぐら}をかき続けてきたわれわれ現代人に対する100年以上も前の時代からの警鐘とも受けとけられるような作品群でもある。

II

本稿では、筆者が翻訳を担当した「オーロラの娘」「王様献上の鼻」「思いもかけぬこと」「原始時代に返る男」「戦争」と、一緒にかかわらせてもらった「お春」の計6篇について順次考察してみたいと思う。

i) 「お春」(“O Haru”)

この作品は、ロンドン21歳時(1897年7月)に『センチュリー』誌に送られたが、結果的に日の目を見ることがなく、何と90年の時を超えて1988年に、*The Complete Short Stories of Jack London* (Stanford University Press) に収録されて甦ったものである。ロンドンのプロの作家としてのデビューが1899年1月だとすれば、その1年半も前のことになる。同じ1897年7月の下旬には、例のクロンダイクのゴールド・ラッシュに向けて出発し、その厳冬を現地で越し、翌年の8月初めに帰還した。その1年間こそは、ゴールドの鉱脈ならぬ彼の文学のまさしく一大鉱脈(「極北もの」)を掘りあてる重要な期間となったのだ⁵⁾。

そんな無名時代の小品ながら、「お春」はとて⁶⁾も21歳の若者が書き残したとは思えないほどいくつもの興味深い視座を読者に示してくれる。F・ウォーカーに、その概要を説明してもらおう。

……, and ‘O Haru,’ the tale of a geisha girl, descendant of a samurai, who in her disappointment over her marriage commits hara-kiri while dancing before her enthusiastic admirers. It is heavy with local colour. <下線引用者>

これだけでも「芸者」「侍」「腹切り」と、日本独自の用語が3つも顔をのぞかせる。さらには、手に取るような茶屋の熱気と興奮の臨場感、最後のお春自身の切腹場面の前触れないしは予告とも受けとれるような前段の彼女による迫真の大石の切腹に至る場面、……と数えあげれば切りがない。上記収録短篇集についてT・ウィリアムズが書評しているように、

Dated by the editors as belonging to 1897, “O Haru” is quite a revelation leading one to suspect it may have been written later. Was 1897 a guess? …… (中略) …… Dealing with a sensitive geisha’s reaction to her lover’s contamination by white civilization, not only does this story exhibit some surprisingly early mature qualities in the young writer ……⁶⁾ (後略)

といった指摘が首肯できる1篇なのである。すなわち、1897年に早くも、すこぶる円熟した作家の諸特質を示してみせたことに対する驚きである。17歳でアザラシ狩りの船に乗り組んで、10日ばかり小笠原に碇泊し、帰途に横浜に立ち寄って2週間ほど滞在しただけの経験で上記のことが果たして可能なのか、という疑問は残る。ただ、すでに過去(1975年)に筆者が取りあげた習作期における作品をいくつも書いて発表していたことも忘れてはならないのではあるが。また、

ハーンに対するロンドンの評価は高く、…… (中略) ……「おはる」は、おなじく彼の「ニルヴァーナ」(“Nirvana A Study in Synthetic Buddhism,” *Greenings in Buddha-Fields*, 1893) や「勇子」(“Yuko: A Reminiscence,” *Out of the East*, 1895) から発想や情報を得ていると思われる。⁷⁾

との指摘もあるが、それにしても「お春」に描きこまれた忠臣蔵や仏教に関する知識と理解には舌を巻く。「大名のお気に入り娘として侍の血を受け継いで」⁸⁾いるお春が、忠臣蔵の大石内蔵助を演じるのだが、そこには「忠義」が貫かれている。思わず大石の辞世の句「あら楽し 思いは晴るる 身は捨つる 浮世の月に かかる雲なし」が浮かんでくるほどである。さらには、「意地、面子、義理、信義、たしなみ、体面」⁹⁾といった武士道の奥義までもが、お春の血の中に脈々と受け継がれているのである。

恋人その後夫となった豊臣の変貌ぶり——まさに天国から地獄に (p. 15) ——は、お春をとある寺院へと向かわせ、僧侶に導かれる。そして、彼の「生にしがみついているだけの人生は、悪です。極楽の状態である涅槃の無我の境地になることで、心安らかな極上の精神的喜びが得られるのです」(p. 20) といった言葉に救いを見出す。この一種の悟りと前述の「侍の血」とがない交ぜになって、いよいよ最後の復帰公演を迎える。前段での熱狂的な舞台の降り方とは一転、お春は「短刀で腹を突き刺すと、血しぶきが飛び散」(p. 23) り果てるのである。まさに

『葉隠』の「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」…… (中略) ……自分の信ずる道、信念や価値観、義のために死ぬことを怖れるなということ¹⁰⁾です。

を地で行く生き方を全うした短い人生であった。重なるようにもう1つ大石の残した言葉「よく生きることを知らぬ者はよく死ぬこともできぬ」が体現された最期であると言えよう。

ところで、上述の「短刀で腹を突き刺すと、血しぶきが……」に関してだが、筆者の知人である日本舞踊家がこの作品を読まれて、用語その他についていくつかの親切な指摘をされた。その結論部を記して参考に供したい。

「実際に死ぬとなったら、着物の上から切れないし、腹をさらけ出すという行為は昔の女性にとって恥そのもの。武家の女が自決する時は、それなりの作法(白い着物に着替え、座る。ひざを乱れない様に紐でしばり、胸か首を一突きにする)があったと思われる。それよりも、芸を極めたお春が神の宿る神聖な舞台を血で穢すとは、考えられない。よく人は舞台上で死ねたら本望というが、これは自然死の事である。」

ii) 「オーロラの娘」(“A Daughter of the Aurora”)

次に移ろう。純日本調から一転、極北の地が舞台である。その意味では、いわゆる「極北もの」に属する短篇なのだが、舞台や背景はまるで違っても、“奇想天外”な物語の結末という一点では符合する。

1899年8月、ロンドン23歳の時に執筆され、4ヵ月後の12月にサンフランシスコの *The Wave* 誌に掲載された。そしてそののち1901年の5月に、彼の2冊めの著作 *The God of His Fathers & Other Stories* という短篇集に収録された11篇中の9篇めが本作である。

「オーロラの娘」ことジョイ・モリノウが「一番新しい求婚者2人のうちどちらを選ぶか」(p. 30)が極北の地フォーティ・マイルの人々の大きな関心事となっているあたりから始まるこの短篇は、単調な背景ながら読者をして危ぶんで気を揉ませるようなプロットになっている。2人とは、ジャック・ハリントンという極北の地切つての橇^{そり}引き犬さばきの名手と、ルイ・サヴォイである。彼女はこの言い寄る2人の男を翻弄し、「家族をちゃんと食わせる」(p. 27)ことのできるほうと一緒にしてもいいと、いわゆる天秤にかけるのである。彼女は、

どんな求婚者でも苦しめずにはおかない質^{たち}だ。それにこの時のジョイときたら、すごく気を引く存在だ。唇が少し開き、きびしい霜にあたって頬の血色が増し、目ときたら女の目にしか見られないような最高の魅力に満ちている (p. 28)

というわけだ。まさに男・金・人々の注目のすべてを手に入れられる存在なのである。そこへもって

男というのは、個人であれ集団であれ、根深い女のずる賢さにはめでたいほど愚かな一生を送るようにできているもので、フォーティ・マイルの男たちもジョイ・モリノウの内に潜む魔性を見抜くことができなかった。(p. 32)

こうした諸々の欲望が入りまじるなか、いよいよ^{ゴールド}金の採掘請求地獲得を目指す160キロにも及ぶ犬橇競走がくり広げられる。参加者60名とはいっても、注目の的はハリントンとサヴォイの両名。当然のことながら、流域の人々を巻きこんでの賭けの対象はこの2人に絞られる。

零下50度あるいは60度という極寒の張りつめた空気の中で、様々な駆け引きが行なわれる。とりわけ、出発の間際になってジョイ・モリノウが、

ロン・マクフェインというハリントンの橇引き犬のチームを受け持っている男を横に引きよせた。彼女の口から最初の言葉が出てくるやいなや、ロンの下あごが何か大変なことをにおわせるようにがくっと強い調子で下がるのが認められた。(p. 33)

という、この物語のちょうど中ほどあたりの意味深長なやり取りが、^〇延いてはレースの結末部のサヴォイの大逆転勝利を呼びこむことになる、と予測できた読者はそう多くはないだろう。『奇想天外傑作選』を銘記しているのでなければ、大方の予想や賭けに反してサヴォイが勝つというどんでん返しでそのまま幕となるのも小気味がよい。

さらに2点ばかり付け加えておきたい。まずは、タイトルの「オーロラの娘」のオーロラについて。今は現地に赴かなくとも鮮明な映像で極北の地を見ることができが、オーロラとは、

地球の南北極に近い地方でしばしば100キロメートル以上の高さの空中に現れる美しい薄光。不定形状・幕状など数種あり、普通、白色または赤緑色を呈する。主として太陽から来る帯電微粒子に起因し、磁気嵐に付随することが多い。極光。¹¹⁾〈傍点引用者〉

である。妖艶な色模様といい形といい、その神秘的とも言える現象は、そのまま上に引用したジョイ・モリノウの仕ぐさや様々な私利私欲と重なる。まさしく極北の大舞台を手玉にする「オーロラの娘」であると言えよう。

もう1点、犬橿レースだが、この作品のように100年以上も前の昔の話ではなく今日も、その目的や走行距離等は違っても、「世界一過酷な犬橿レース」が行なわれていることを付言しておきたい。2012年8月14日のNHK総合テレビのハイビジョン特集：「オーロラの犬ぞりレース」によれば、フェアバンクスをスタート地点としてドースンを経てホワイトホースをゴールとする1,600キロに及ぶレースが今も開催されているという。2010年2月のレースには、7カ国から24名が参加して、各チーム1人+アラスカン・ハスキー犬14頭の構成で激しいレースが展開された。ジョイ・モリノウのような思惑がらみのレースではないにしても、人間の飽くなき冒険心というのは今も連綿と脈打ちつづけているようである。

iii) 「王様献上の鼻」(“A Nose for the King”)

これも、意外性に富んだ^{ひょうきん}剽軽とも称せる小篇である。ロンドン自身の言葉を借りれば、親友アンナ・ストランスキーに宛てた手紙（1904年10月13日付）に“Am sending you “The Nose” [“A Nose for the King”] for a wee bit of a smile.”¹²⁾とあるし、さらにはマクミラン社のジョージ・P・ブレットに宛てた手紙（1904年12月8日付）には

It may interest you that I've won a *Black Cat* prize—a minor prize, for it was a skit [“A Nose for the King”] written, typed, and sent off in one day.¹³⁾

とも書いている。要するに、笑いを誘うような小品、寸劇というわけだ。

1904年といえば、前年の夏に『野性の呼び声』を出版し、それからベストセラーになって一躍花形作家としての名声を獲得した頃のことである。1904年1月からは日露戦争の従軍記者として半年近くにわたって、2度めの来日を始め、さらには朝鮮半島から鴨緑江のあたりにまで足を延ばした。その朝鮮での体験の数ある成果の1つが、同年10月執筆のこの「王様献上の鼻」で、『ザ・ブラック・キャット』誌のコンテストに勝って350ドルを獲得したのだった（同誌掲載は1906年3月）。

数年前以来今日も、韓国ばかりでなく日本においても、韓流ドラマが大ブームになっているようである。朝鮮王朝ものから現代劇に至るまで毎日のようにテレビ放映されている。「王様献上の鼻」も、結果的にそうした朝鮮王朝ものに沿う形のごく短い物語である。日本でもその翻訳は早く、「陛下御用の鼻」という題で1907年に訳されている¹⁴⁾。中田幸子氏も別の著書に記されている。

日露戦争従軍記者の経験は、夢や冒険の世界をふくらませる1つの手掛りをロンドンに与えたことも明らかである。短篇「陛下御用の鼻」や『ジャケット』の中のアダム・ストラングの話は、古い時代の朝鮮を舞台にしているし、日本や日本人が、異国情緒を満足させるような姿で、彼の作品のあちこちに登場する¹⁵⁾。〈傍点引用者〉

傍点部を朝鮮や朝鮮人と置き換えれば、この作品に当てはまるだろう。なお、この面白い作品は、ロンドン自身の着想によるものではなく、ある朝鮮人に聞いた話のようである¹⁶⁾こともつけ加えておきたい。

さて、「朝鮮」とは「朝日が鮮明なところ」という意味であり、……（中略）……「コリア」

とは、朝鮮の初の統一国家であった高麗^{コリョ}から派生した言葉¹⁷⁾というが、「王様献上の鼻」の書きだし「朝の静けき高麗^{コリョ}」——平安と静穩こそは、誠その昔日の名称「朝鮮^{チョーセン}」の名にぴったりである」(p.44)も、それに添うものであるだろう。

そういう朝鮮王朝下にあつて、まるで思いも寄らないような話が手品師の手にかかったかのように糸のように紡ぎ出されていく。主人公の政治家イ・チンホは、不注意から公金を多額に流用したかどで死刑の判決を受け、投獄されている。そして1時間足らずのうちに首がはねられてしまうという看守の話にもかかわらず、うまく取り入って一時的に出所し、知事のところへ赴く——「鼻」の話を携えて。その鼻がまた信じがたい形をしているのだが、その鼻を描いた紙をいかに入手したかも不詳である。そうして旅に出て、ある市^{まち}の首長パク・チュングチャンクの邸宅を訪ね、鼻の絵を見せ、彼の父親がその鼻の持ち主だと決めつけ、父親の鼻を切り落とすと迫り、パクはその代わりにイ・チンホの流用した分の金(10万本の縦糸)を払わされるという何とも滑稽な小話なのである。

大雑把なプロットだが、そんな突拍子もないようなものであつても、首肯できるような仕掛けが所々に施されている。たとえば、看守とのやり取りでは、

「わしが今後ずっとあんたが昇進できるように取り計るし、いつか必ず朝鮮の全囚人を管理する地位に就けてあげよう」(p.44)

といった甘言や、(看守は)「結局のところ、頭^{おつむ}が弱く気の優しい男でもあつたので」(p.45)といった表現をはさむことで物語をつないでいく。

また、パクの邸宅を訪ねるところからは、「王様の御用」という表現が立て続けに都合5ヵ所で現われる。絶対的な権力を有していた「王様の御用」は、まさに金科玉条であり、パクに有無を言わせない。それを盾に取って無理難題を吹っかけるのである。加えて、自分の父親の鼻をさし出せとなると、親に孝養を尽くすのが朝鮮の大きなモラルの1つであるから、結局イ・チンホの過大な要求に応じざるを得ない。たわいもない話と言つてしまえばそれまでだが、パクを除く他の関係者は万事めでたしで幕となる。イ・チンホは無論、知事も、看守も。それこそ、書きだしの文言「平安と静穩」の状態に回帰する(パクの場合は、「他言無用」(p.52)の故に静まりかえつてしまう)というわけである。

iv) 「思いもかけぬこと」 (“The Unexpected”)

4つめの作品に移ろう。「訳者あとがき」にも記した通り、「それまで平穩で単調な生活を送っていたイーディスという女性が、25歳のときにアメリカに移住し、生活が一変する。文字通り“思いもかけぬこと” ずくめにどのように対処し、その後どのような結末を迎えるのか？」(p.219) といった大枠である。こんな話などあり得るのかといった評がシアトルの *the Post-Intelligencer* に載ったことに対し、ロンドン自身が同誌の編集者に1906年8月2日付で次のように回答している。

If you will turn to your file of the *San Francisco Examiner* for October 14, 1900, you will find there an account of the double-murder committed by Michael Dennin, and of

his hanging by Mrs. Nelson and her husband Hans. I quote from that article the following: “The United States Court, before whom Mrs. Nelson and Hans laid the whole matter of the crime and execution of Michael Dennin, has decided that the hanging of the murderer was a judicial execution.”¹⁸⁾

どうやら殺人者マイケル・デニンやネルスン夫婦の名前まで実名だったようだ。逆に言えば、編集者がこの作品を嘘だとしてはねつけるほど信じがたいストーリーの内容になっているということである。但し、四囲の孤独感や異様さを強調するために、季節を真冬に変えたり、その他あれこれ工夫を加えたりもしたようである。¹⁹⁾

作者は、冒頭から次のように始める。

わかりきったことに気づく、予定されていることを行なうというのは、単純なことだ。個人の生活というのは、動的というよりも静的な傾向にあり、この傾向は文明生活によって押し進められ、そこではわかりきったことだけが見え、思いもかけぬことなどめったに起こるものではない。とはいいいながら、思いもかけぬことが実際に起こり、十分に重大な意味合いを帯びるとなると、不適格者は非業の死を遂げる。…… (p.54) 〈下線および傍点引用者〉

と、現代文明生活を2つの側面に切り分ける。わかりきった安泰な側面が1つ。そこでは波風もほとんど立たない。ゆるやかな川の流れのごとく過ぎてゆく。ところが、今引用した箇所を含む最初の段落だけでも、傍点部を含め計3つの「思いもかけぬこと」が騒ぎだす。この作品で「思いもかけぬこと」ばかりが連続して起こる兆しが、冒頭から小刻みに見てとれるのである。

そうした文明社会の「何も起こらない」(p.55) 環境に身を置いていた女主人公イーデイスが、ふとした機会からイングランドをあとにし女主人公に付き添ってアメリカへ渡ることが一大転機となる。以後「思いもかけぬこと」が頻りに顔を覗かせ、その回数は作品全体で総計16にも及ぶ。ハンス・ネルスンと結婚し、コロラド→両ダコタ→アイダホ→オレゴン東部→ブリティッシュ・コロンビアと転々としていくだけでも大変なことなのに、ゴールド・ラッシュでクロンダイク地方へと赴くことになって、「大変な思いもかけぬことが、まだこれから先彼女の生活に登場し試練を課することになる」(p.57) というのである。

黄金欲に取りつかれた暗闇・極寒の極北の地が舞台となれば、もうロンドンのお手のものである。偶然3人の男たちがネルスン夫婦と同じ小屋に暮らしながら砂金掘りをするが、ある朝マイケルが朝食の時間に現われない。冗談を言いあっているうちに、彼が入ってきて、仲間の他の2人ダッチイとハーキーをいきなり銃殺してしまう。そうして、夫婦はマイケルを縛りあげ、2人で交代しながら

長時間にわたって見張りをし、膝に散弾銃を置き、そばでは殺人者が落ち着かず、外では雷鳴がとどろく大吹雪となっているなかで (p.79)

殺人者の処分をどうするかに腐心する。夫の考えに反し、イーデイスは「然るべき法廷で裁判にかけ」(p.77) るべきだと主張し、最終的には、地元インディアンの全シワッシュ族が証人となるなか、ハンスと彼女の2人で証人、陪審、判事——それと死刑執行人——の役まで務めなけれ

ばならない状況下で、絞首刑が執行されて幕となる。

こうした異常な——思いもかけぬことだらけの——話に迫真性を付与しているのが、上述のF・ウォーカーも触れていたが、ネルスン夫婦がダッチイとハーキーの遺体を埋める墓穴を掘る場面、

地面は凍っていた。つるはしで叩きつけても通らない。まず薪を集め、それから雪をかきのけ、凍った地表の上で火をおこした。火が1時間ほど燃えたと、地面が数インチ解けた。そこを2人でシャベルですくうと、またあらたに火をおこした。1時間に2、3インチの割合で、2人は土の中へと降下していった。(p.72)

そして、仕上がった墓の深さはせいぜい60センチほど (p.72) といったあたりやその他の極寒を描きとる手法等々は、摂氏マイナス30度はおろか40度や50度を身をもって体験した作家が発揮した真骨頂とも言うべき箇所であろう。

最後にもう1点指摘しておきたいことは、前訳書『ジャック・ロンドン 多人種もの傑作短篇選』(傍点筆者)のいわゆる多人種がとりわけこの作品にも顕著に登場している点である。むしろ人種的な観点からすれば、この作品など前訳書の中に入るものかも知れない。その人種の多さだけ見ても、圧倒される。女主人公イーディス・ウィトルスイはイングランドであったし、その夫となったハンス・ネルスは「スウェーデン生まれの(アメリカへの)移民で、職業が大工の男には、たえず西へと大冒険に狩り立てるチュートン人の落ち着きのなさがあった」(p.56)し、仲間となった「ハーキーという背の高いやせたテキサス人は、陰気な気性の人間に対してひどく気さくであり、^{ゴールド}金は成長するというその持論に反対されないかぎり、きわめてつき合いやすかった」(p.59)し、殺人者になるマイケル・デニンは、「そのアイルランド人の^{ウィット}機知が小屋を陽気にするのに役立った。……」(pp.59-60)し、もう1人のダッチイは、一行の都合のよい嘲笑的であった。事態を楽しくするためには、自分を犠牲にしてまでわざと笑いを催させようとまでした。……」(p.60)さらには、ニグークを村の長とするシワシュ族の^{たみ}民たち、とかなりの数の人種が勢揃いだ。そしてこれら多彩な顔ぶれが、ともすると単調になりがちな極北の地の物語を豊かで味わい深いものになっている。数々の“思いもかけないこと”とともに。

v) 「原始時代に返る男」(“When the World Was Young”)

次の「原始時代に返る男」も、奇想天外を地で行く作品である。文字通りには「世界が若かった時」であろうが、何となくしっくりこない。作品全体を見通しているようには思えないからで、別の作品 *Before Adam* (1907) を訳した際にも『アダム以前』ではなく『太古の呼び声』(平凡社、1994)とした。全貌を伝えることは無理でも、日本の読者がタイトルを見てある程度の見通しを立てられるような配慮は必要だろうと思う。内容をひとこと言えば、「昼間は都会にあってばりばりの実業家、なのに夜になると野山を縦横に駆けめぐる獣に変身。」(p.220)といった容易には信じがたい物語である。

「王様献上の鼻」もそのユニークな話に訳者が引かれてか、ロンドン作品のなかでも最初に邦訳されたものであったが、この「原始時代に返る男」もおそらくは同じような理由で、早くも1922年に「世界が若かった時」と題して和氣律次郎によって大阪毎日新聞社から出ている。²⁰⁾大正

11年のことである。（その2年後に「獣人」と題して健文社からも出ているようだが、中身は不詳。）

この作品が書かれたとき、ロンドンはずでに34歳で、

…… added no luster to Jack London's reputation but among his 200 published stories, it is a moderately interesting, marketable piece of popular fiction and it contains a psychological element that London doted on: *atavism*, the recurrence of or reversion to primitive characteristics of remote ancestors.²¹⁾

といったまずまずの評価も見える。

さて、それほど長い話ではないにもかかわらず、I II IIIの3章仕立てになっている。まずは、「男は、ひじょうにおとなしく冷静なタイプだった」（p.90）〈傍点引用者〉で物語は始まる。ロンドンの短篇では、主人公でも名前を出さないことは珍しくない。名短篇ともいべき「焚き火」（“To Build a Fire”）や「生命にしがみついて」（“Love of Life”）など、その代表的なものである。かと思いきや、この作品では最初の「男」は実は主人公ではない。ただの野盗なのである。しかも彼は、II章の初っぴなになると、デイヴ・スロッターというフル・ネームで再登場する。そして続いて名前が現われるのが、主人公のジェイムズ・ウォードといった^{あんばい}按配である。したがって、IIに至って2人がどういう関係にあるかが判明するまでのIの描写はまさに五里霧中で、IIとIIIに至ってその霧が晴れるという優れた仕掛けになっているのである。

冒頭から闇、暗闇、風のうなり声、サラサラ、濃い霧、……（p.90）と、静を引き立たせる描写が続く。実は、この野盗がミル・ヴァレーにある主人公の家に押し入ろうと庭に侵入したところ、「裸の男らしきもの」（p.96）とでくわすのだ。そして最後は、そいつが丘の頂上づたいにコヨーテを猛スピードで追いかけるのを目にするのである。ミル・ヴァレーとは、

サンフランシスコの北西側にあり、住宅地。近くにミュアー国定森林記念物がある。1834年ジョン・リード²²⁾が入植。牧畜業と林業が行なわれた。市名は、リードが建てた製材所（saw mill）に由来する。

であり、『マーティン・イーデン』にも出てくるタマルパイアス山（約780m）の南東麗に広がるエリアだ。

こうした舞台を背景に「裸の男らしきもの」は、自在に文字通りまさに暗中飛躍するが、それを下支えし読者に緊張感を保持させつづけるのが、上に引いた音である。さらには、「それから、事が起こった——まったく^{思いもかけないこと}であった」（p.91）〈傍点引用者〉、荒い鼻息、ドスンとものすごい音、バサバサ、風のうなり、霧の露がポタポタ、ドサツという音、バタバタとすばやく足が路面を打つ音、「あーあー！」、騒々しい吠え声、荒々しく気味の悪い歌、ブツクサ等が見えるが、静まりかえったあたり一帯にこうした擬音を中心に配置することによる静寂強調の効果は、他の作品にも見られるものの、このIにおいてはとりわけきわ立っている。それが、II以降の思いがけないことへとつながってゆくのである。

IIに入ると、夜盗のデイヴ・スロッターは、一転サンフランシスコ市内金融街のウォード＝ノウルズ商会の社長に面会に行く。昨夜（I）の一件でくわしたことをくり返し説明し、ゆすりをかける。が、ウォード氏のあまりにも紳士的な対応ぶりに、「あの野蛮人は、どうやら

ウォード氏とは兄弟で、ひそかに監禁されている精神異常者なのだ」(p.100)との判断に落ち着く。ⅠからⅡ、そしてこの作品中では最も長い大詰めへと、デイヴ・スロッターは結構重要な橋渡し役を務めたことになる。

Ⅲになって、ようやくウォードの中身と悩みが明かされる。すなわち、Ⅰでコヨーテを追いかけた野蛮人とⅡのジェイムズ・G・ウォードが同一人物であることが判明する。つまり、ジキル博士とハイド氏ならぬ二重人格が内在するというわけである。

一方の自己は、育ちや教育が当世風であり、19世紀後半を生きぬき、20世紀も最初の10年間をたっぷり生きてきた人間の自己であった。もう一方の自己はといえば、数千年前の原始的な状況のもとに暮らす野蛮人というか未開人と位置づけた。だが、どちらの自己が自分で、もう一方はどっちなのか、どうしてもわからない。…… (p.103)

いわば、「自分の半分が最近のアメリカ人で、あとの半分が初期のチュートン人」(p.108)が共存するわけである。

この二重人格をめぐる問題については、すでに2氏の論考²³⁾があるのでそちらに譲りたいと思うが、Ⅲの中ほどから事態はさらに大きな終局に向かって動く。リリアン・ガースデイルとの出会いに伴い、昼と夜の過ごし分けが問題となって浮上する。ウォードは、懸命のトレーニングを重ねて昼夜の生活を逆転させようとする。やがて、リリアンを始め10名余りを宿泊客として接待するのだが、あるサーカス団の巨大な灰色熊が逃げだし、よりもよってウォードの庭先に現われる。粗暴な野蛮人に変身したウォードは、みんなの前で大格闘の末に、その熊を打ち殺してしまう。みんなの歓呼の声にも、

……自分の愛する色白で金髪のか弱い20世紀の女性を見て、頭の中で何かがポキンと折れる気がし (p.116)

て、この時を契機に「彼の内側にいた大昔のチュートン人は、……(中略)……消えてなくなったのである。」(p.117)

まったく突拍子もないと言えばその通りで、たしかに人間の二面性を極端に突き詰めたストーリーではある。当然のことながら、

1人の人間がなぜこうも簡単に変わってしまうのか。……(中略)……文明社会の機構の中で40年の半生を過ごし、社会的地位もある人間が、最後は現代のすべてを捨て去り、裸同然の格好で気の赴くままに山々を駆け回るとしたら、それはもはや正気の沙汰ではない。ウォードの原始人が突然消滅した以上に不自然な結末となるであろう。²⁴⁾(傍点引用者)

との見解もあり、筆者も同感ではあるのだが、だからと言って単に荒唐無稽のひと言で一刀両断にしてしまえない不思議なフィクションの魅力をもっている。そして、上述の今田論文 (p.256)の「あとがき」にもあるように、

この短篇には、強い生存本能と野性に満ちた人類の遠い過去の原始状態に対する我々文明人の郷愁を意識させる

という点で、すこぶるユニークな作品として読み継がれてきたものではあるだろう。

この作品発表からちょうど100年余り、現代文明社会がそれこそ異様な突っ走り方をしてきた結果としての今日現在、内容も次元も異なるにせよ、正気の沙汰どころではない出来事や犯罪がもはや日常化していると言っても過言ではない。とすれば、異常なのはむしろ今日現在のほうなのであって、「原始時代に返る男」に新鮮とも言える読後感を抱くのは筆者だけであろうか。

vi) 「戦争」 (“War”)

最後に、「戦争」に移ろう。今回取りあげた6篇のなかでは最も短い作品で、分量的には「王様献上の鼻」とほぼ同じ長さである。しかしながら、内容的には数あるロンドンの短篇のなかでも秀逸なもの1つと言って間違いないだろう。過去には、「ヘミングウェイを予期させる詩的な物語²⁵⁾」との記述もあった。

『奇想天外傑作選』に「戦争」を翻訳し収録することに決めたのは、最初は森孝晴氏の研究ノート²⁶⁾を読んで触発されたことによる。さらに他の資料にも改めて目を通していくと、

Literary analyst Earle Labor has termed it “a little masterpiece which deserves to be ranked with the best war stories of Stephan Crane and Ernest Hemingway,” and critic Dale Walker sees it as “a gem, a diamond which is virtually unknown today.”²⁷⁾

といった絶賛と言ってもいい、それも高名な研究者・批評家の手になる評に目が行ったからである。

この作品も、すでに触れた主人公の名前を出さないものの1つである。「男は、せいぜい24、5歳の若者で」(p.120)から始まり、最後まで名前が出ることはない。文字通りどこかの戦争に加わってどこかの部隊からさし向けられた若い斥候ないしは偵察兵なのだが、初っぱなから極度の緊張感が漲^{みなぎ}る。最初の段落から「きよろきよろあたりを隅なく探り」「目と耳は凝らしている」「気の張りつめ方ときたらものすごかった」「緊張の度合いがひどく」(いずれも p.120)といった表現が見え、そこへ「小鳥たちが飛びまわる小枝や枝の動き」や「重砲のとどろき^{うづら}」「鶉の群れが馬の鼻先からどっと飛びだす」(いずれも p.120)といった様々な音によって、緊張感、1人の心細さや静寂等がいや増す。ロンドン一流の技巧である。

おまけに気候は、極北の地とは対照的に、男が馬に乗っているにもかかわらず汗びっしょりで、「息もつけないほどの暑い真昼」(p.120)なのだ。やがて、誰もいない百姓家、そしてその近くの小川へと出てくる。川の反対側に敵の男が「水筒に水をいっぱいに入れようとする」(p.124)のを目撃するが、主人公の若い男は撃たない。これでI章が終わる。結果的には、この時に射殺してしまわなかったことが災いして、その後主人公がこの敵の男に射殺されてしまう羽目になる。

IIに入ると、「またあらたな1日も、暑くて息もつけないほどだ。人けのない農家が、納屋や馬小屋などの離れ家、それに1枚の果樹園とともに、空き地に大きく立っていた」(p.125)から始まる。このあたりでそれほど遠くない時期に戦いがあったようで、その痕跡があちこちに見える。その最たるものが、

勝手口のそばの檜の木からは、風雨にさらされぼろぼろになった衣服を着た、2人の男の遺

体がぶら下がっていた。その顔は、^{しわ}皺が寄って破損しており、およそ人間の顔と似たところがない。(p.125)

である。これなどは、主人公の若者の最後とその行く末までも見越したような描き方であろう。そして最後は、12人の敵兵がやってくるなか、果樹園でもぎ取ったリンゴをシャツにくるんで逃げる際、若者は皮肉にもあの小川ででくわした男によって射殺されてしまう。「彼のまわりに赤いリンゴがぱっとはじける」(p.128) 様は、作品全体にわたっても言えることだが、映像を見ているようで、優れて印象的である。彼の体から血が^{しぶき}飛沫となって散る様をこのようにダブらせて描いてみせたのは、みごとと言うほかあるまい。

「赤」と言えばこの作品にも、様々な音とともにほかにも様々な色(黒、黄色、生姜色、青など)が目飛びこんでくる。上述のヘンスリーは、いわゆるカラー・シンボリズムなるものを詳細に取りあげている。にもかかわらず、その論からあまり間を置かずに(2年ほどで)ロバート・H・ウッドワードが、ヘンスリーに論駁し、

An arbitrarily and conveniently selected, but nonetheless rigid, system of color symbolism has resulted, in this instance, in a distortion of the intent and artistry of the story.²⁸⁾

と、なかなか手厳しい。

もう1点は、この「戦争」をどの戦争と特定するのか? の問題である。森氏は、椋鳩十同様「戦争」が日露戦争を題材に取った作品であることはまず間違い²⁹⁾ない」としている。上のヘンスリーなどは、

The best guess would be that it takes place during the American Civil War, for in the context of the story we learn that the soldiers are riding on horses, that their standard weapon is a carbine, and that the weather is hot and the countryside is farmland, much like the southern United States.³⁰⁾

と、南北戦争と推断している。

筆者はどちらかと言えば、「ロンドンが1911年以前に直接戦争を体験したのは日露戦争以外³¹⁾ない」とする森ノートに与するが、それでも、どの戦争と特定する必要はないものとする。ウッドワードが記したように、

A story about war—unless it is fantasy or science fiction—must have a setting that is consistent with the topography of the planet which the author and the readers share. What particular war is not important, ……³²⁾

なのである。弱冠20歳過ぎぐらいの無名の若者をこの世から皮肉にもあっけなく消し去ってしまう戦争というもののむごさと不条理とを突き詰めた短い無駄のない——なさすぎる——作品であり、そんな珠玉の名篇を残したロンドンの功績は計り知れない。

III

以上、『奇想天外傑作選』に収録した作品のうち6篇について論評を試みた。どれもきわめてユニークな筋立てであり、書かれてから「お春」で120年、「戦争」でも100年余りの時を超えて読み継がれてきた。いずれも、日本、極北、朝鮮の刑務所、不特定の戦場と、およそ通常ではない（「原始時代に返る男」の舞台だけは通常）所を舞台・背景とする“思いもかけぬこと”が続出する作品ばかりである。

そんな1世紀以上を経た今日、これらの作品群が決して突拍子もないところではない大事件・大事故が瀬発している。①東日本大震災と大津波（2011年3月11日）を筆頭に、めぼしいものを（いずれも京都新聞から）拾ってみる。〈年月日は発行日〉

- ② 刃物男、信金立てこもる——1人解放、人質4人〈愛知・豊川〉（2012年11月23日）
- ③ 大雪 首都圏交通乱れ——転倒など260人超けが（2013年1月15日）
- ④ 。ロシアに隕石落下——衝撃波、負傷1000人〈ロシア南部ウラル地方〉（2013年2月16日）
。隕石衝撃波 広島型原発20倍（2013年2月16日（夕））
- ⑤ 北日本今季最強寒波襲来——視界ゼロ走行不能（2013年2月24日）
- ⑥ 東京都心春嵐——強風27.4m 黄砂・花粉・風塵・砂嵐（2013年3月13日）
- ⑦ 刃物持った男暴れ——2人死亡・6人負傷〈広島県・江田島市〉（2013年3月14日）
- ⑧ ボストン連続爆破テロ——修羅場の救護テント（2013年4月17日）
- ⑨ 米巨大竜巻 51人死亡——学校崩壊 負傷145人〈米・オクラホマ〉（2013年5月21日（夕））
- ⑩ かと思いきや、本稿執筆中の2013年6月13日は猛暑日となり、大阪府豊中市で37.9℃、京田辺市で37.5℃等々を日本各地で記録した。

もう1つ付け加えると、「マグニチュード7の首都直下地震の発生確率は今後30年以内に98%（東京大学地震研究所³³）」や南海トラフの巨大地震予測などもある。……

「東日本大震災と大津波」を含めると、10件のうち7割までが大自然がもたらした災害である。残る3割がいわゆる人為的なもので、本稿で取りあげた作品群に連なるものと言えよう。②といい⑦といい⑧といい、規模こそ違え、ある日ある時に“思いもかけぬこと”が古今東西起こる・起こり得ることを伝えている。③⑤⑥などは、現在よりもはるかに困難な条件下にあつて極北を始め世界を駆けめぐったロンドンにとっては、難なくクリアできる類いのものだろう。おそらくは彼自身が体験し得なかつたであろう④⑧そして⑨あたりが、最近立て続けに起こった想定外の事件・事故であり、彼の守備範囲外だった。（もっとも、ロンドン存命中の1908年に「ロシア・シベリアの上空で大爆発。隕石か彗星の関連が指摘されている」とだけ同じ新聞に出ている。）ということは、今日でも10件中7件までもが彼の守備範囲内と考えられるのである。まったく想定外のことがこれだけ頻繁に起こって人々の度肝を抜く今日から読みかえしても、その奇抜な発想とプロットは今後も読者をうならせ続けるに違いない。

そのことと関連して最後に、最近読んだ文学関係書に次のような味わい深い1文を見つけたの

で、引いておきたい。ペルーのノーベル賞作家マリオ・バルガス = リョサの言葉である。

すべての小説、自由奔放な想像から生まれてきた小説でさえ、それを創造した人の体験の総体と分ちがちがたく結びついています。…… (中略) ……すべての小説は作家の記憶に刻みつけられ、創造的な空想を作動させることになったある種の出来事や人物、状況に基づいて、幻想と技巧を用いて築き上げられた構築物なのです。³⁴⁾

(June 14, 2013)

注

- 1) 拙著『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く』(丹精社, 2001), pp.473-4) 参照。
- 2) 同上, p.483.
- 3) 辻井・芳川訳『ジャック・ロンドン 多人種もの傑作短篇選』(明文書房, 2011)
- 4) 辻井・芳川訳『ジャック・ロンドン 奇想天外傑作選』(明文書房, 2013)
- 5) Franklin Walker, *Jack London and the Klondike* (San Marino: The Huntington Library, 1972), p.41.
- 6) Reviewed by Tony Williams (*Jack London Foundation Newsletter*, Vol.6, No.3, July 1994), p.7.
- 7) 中田幸子著『父祖たちの神々』(国書刊行会, 1991), pp.61-2.
- 8) 辻井・芳川共訳, 上掲書, p.11. 以下本書からの引用は、引用文のあとにページ数をもって示すこととする。
- 9) 山本博文著『「忠臣蔵」の決算書』(新潮新書, 2012) 参照。
- 10) 笹森建美著『武士道とキリスト教』(新潮新書, 2013), p.129.
- 11) 『広辞苑』第6版(岩波書店, 2008), p.375.
- 12) *Letters from Jack London*, edited by King Hendricks and Irving Shepard (New York: Odyssey Press, 1965), p.165.
- 13) *Ibid.*, p.167.
- 14) 『邦訳アメリカ文学書目』(原書房, 1968), p.108によれば、「春潮訳, 新公論」とある。
- 15) 中田幸子著『ジャック・ロンドンとその周辺』(北星堂, 1981), p.307.
- 16) Victor R. S. Tambling, "A Nose For The King: Jack London's Version of A Korean Folk Story" (*Jack London Foundation Quarterly Newsletter* Vol.14, No.2, 1981), p.78.
- 17) 朴三石著『知っていますか, 朝鮮学校』(岩波書店「岩波ブックレット」No.846, 2012), p.29.
- 18) *Letters from Jack London*, p.207.
- 19) Franklin Walker, *op. cit.*, p.243.
- 20) 上掲『邦訳アメリカ文学書目』p.107.
- 21) Dale L. Walker, "Sinclair Lewis, Jack London, and Tarzan of the Apes" (*Jack London Foundation Quarterly Newsletter* Vol.25, No.1, 2013), p.4.
- 22) 井上・藤井編『アメリカ地名辞典』(研究社出版, 2001), p.237.
- 23) 今田準造「Jack Londonの短篇 *When the World Was Young* に現われた二重人格に就いて」(『名古屋学院大論集』4, 1965) および宮内芳郎「「世界が若かった頃」の分析」(明石工業高等専門学校『研究紀要』第24号, 1982)
- 24) 深沢広助著『ジャック・ロンドン——人・文学・冒険』(北星堂, 2001), pp.165-6.
- 25) *Jack London Newsletter* Vol.6, No.3, 1973, p.152.
- 26) 森孝晴「ジャック・ロンドンと椋鳩十——「戦争」と『マヤの一生』——」(『ジャック・ロンドン研究』第1号, 2012), pp.46-50.

- 27) Dennis E. Hensley, ““War”: Jack London’s the Red and the Black” (*Jack London Newsletter* Vol. 9, No. 2, 1976) , p. 73.
- 28) Robert H. Woodward, “Another Reading of Jack London’s “War”” (*Jack London Newsletter* Vol. 10, No. 3, 1978) , p. 155.
- 29) 森孝晴, 上掲書, p. 48.
- 30) Dennis E. Hensley, *op. cit.*, p. 73.
- 31) 森孝晴, 上掲書, p. 47.
- 32) Woodward, *op. cit.*, p. 155.
- 33) 半田滋著『3.11後の自衛隊』（岩波書店「岩波ブックレット」No. 843, 2012), p. 8.
- 34) 小野正嗣著『ヒューマニティーズ 文学』（岩波書店, 2012), pp. 88-9.